

■開催概要

- シリーズ名称 : 2020 鈴鹿クラブマンレース Round 1
- 主催 : 中日本自動車短期大学レーシングクラブ (ARCN)、鈴鹿モータースポーツクラブ (SMSC)
- 協力 : ARC・AASC・OCCK・KRHC・チーム淀
- 競技 : JAF公認・準国内格式 公認番号2020-2002
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.807km)
- 開催レース : 総参加台数/164台
RS・CS2/16台
フォーミュラEnjoy/14台
TOYOTA GAZOO Racing Netz Cup Vitz Race 2020関西シリーズ第1戦/54台
クラブマンスポーツ/23台
FFチャレンジ/21台
スーパーFJ/21台
FIT 1.5 チャレンジカップ/15台
- 開催日 : 2020年3月14日(土)・15日(日)
- 天候 : 晴れ(決勝日)
- 路面 : ドライ(決勝日)

■次回レース開催概要

- 開催日 : 2020年5月23日(土)、24(日)
- 主催 : チーム淀、鈴鹿モータースポーツクラブ (SMSC)
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.807km)
- 開催クラス : スーパーFJ、FIT 1.5 Challenge Cup、フォーミュラEnjoy、
Clubman Sport 60 Minutes Endurance Challenge (MEC60)
TOYOTA GAZOO Racing Netz Cup Vitz Race 2020関西シリーズ第2戦



2021年、「Netz Cup Vitz Race」が「Yaris Cup」へと生まれ変わることをアピールするためのコンセプトカーが展示された

2020シーズンは年間6大会がフルコースで実施！ 大きく変わったクラブマンの開幕戦が行われた

2020シーズンのクラブマンシリーズは、従来以上に大きな変更点を経て開催されます。年間7大会あるなかで、Round6の西コースを除けば、残り6大会はすべてフルコースでの開催。これまで西コース・東コース・フルコースと鈴鹿サーキットならではの特徴的なコースを使い分けてきたクラブマンレースで、従来と異なりほぼフルコースでのレースが、シリーズチャンピオン争いに大きな影響を及ぼすことは必至です。

また、各クラスに目を向けるとFE1とFE2の混走だったフォーミュラEnjoyはFE1が2019年シーズンで終了となったことを受け、FE2のワンメイクレースになるなど、細かな変更が加えられています。

さて、3月14日(土)、15(日)の2日間に渡り行われたのがシーズン開幕戦「鈴鹿クラブマンレースRd1」です。公式予選が行われた14日(土)は春の冷たい雨に見舞われたものの、15日(日)は晴天。風は強いものの、レース日和のなか迎えることができました。

午前中から全8レースが行われ、52台のヴィッツがエントリーしたのが「TOYOTA GAZOO Racing Netz Cup Vitz Race 2020 関西シリーズ第1戦」です。2000年に日本初のJAF公認ナンバー付き車両によるワンメイクレースとして開催されてきたお馴染みのレースは、2021年より「Yaris Cup」へ名称変更が決定。会場内には早速、ヤリスのカップカーが展示され、熱い視線を集めていました。

新たにFE2のみによるワンメイクレースとなったフォーミュラEnjoy、今シーズンでの終了が決定しているRSクラスなど、変更点が多いことから、どのクラスも見るべきポイントの多いレースが繰り広げられました。

そして第2戦も戦いの舞台はフルコース。CS2クラスとCSクラス(VITA)による60分耐久レースをはじめ、見どころは満載。大きく変わろうとしている鈴鹿クラブマンレースに、シーズンを通して注目が集まります。



スタート直前のRS・CS2クラス。混走クラスでポールポジションを獲得したのは、RSクラスの#27近田直人

■RS・CS2 Class

レースはポールポジションの近田直人が順当にホールショット。近田と同じRSクラスの大城一、阿部博行がこれに続く。CS2クラスは総合4番手を走る徳升広平がクラストップ。すると、CS2はクラス2位をめぐり、いむらせいじ、金久憲司、TOMISAN、FLYING RATらが大バトルを展開。RSクラスもトップの近田が独走態勢に入ると、大城、阿部のバトルが勃発する。6周目で5番手を走るいむらが痛恨のスピン。レースは終盤にかけて、トップを走るドライバーに大きな動きはなく、RSクラスは近田、CS2クラスは徳升が完勝を果たした。



表彰セレモニーでトロフィーを掲げる1位の近田直人(右)、2位の大城一



CS2クラスの表彰セレモニー。優勝ドライバーの徳升広平が笑顔でトロフィーを手にしたことになった

■クラブマンスポーツClass

ポールポジションは元山泰成が獲得するが、ホールショットは2番グリッドのバイエルン松尾がゲット。松尾、山谷直樹、元山の順で先頭集団を形成する。すると序盤のスプーンカーブ立ち上がりで2台のマシンが接触、セーフティカー導入となる。マシンの撤去が困難なため、セーフティカーラン続行中に赤旗中断。残り3周でレースは再開される。トップの松尾を山谷、元山が追う展開は変わらず、レースは松尾がそのまま逃げ切りに成功。2位は山谷、4番手を走る中里紀夫の猛追を抑えた元山が3位表彰台となった。



決勝レーススタート前。レースアナウンサーによるドライバー紹介に手を振って応える優勝したバイエルン松尾



ベストタイムもマークして優勝したバイエルン松尾。2位の山谷は松尾との距離を最後まで詰め切れなかった

■TOYOTA GAZOO Racing Netz Cup Vitz Race 2020関西シリーズ第2戦

2019年の最終戦、Grand Finalを制し日本一のVitzドライバーの名を手にした峯幸弘がポールポジションから堂々の好発進。杉山博紀、橋本達宏、大島和也らが追うも峯は一人だけ異次元の走りの後続を置き去りにする。3周目で1台のマシンがコースアウトしタイヤバリアに接触。セーフティカー導入とともに赤旗中断となる。レースは残り3周で再開。序盤の大きなリードが消え、再開後は2番手の橋本に猛追された峯。ファイナルラップまでもつれたが、峯はトップを譲らず逃げ切りに成功した。



赤旗中断もあり荒れたレースとなった関西シリーズ第1戦。それでも#1峯幸弘が昨年王者の貫禄を示した



赤旗中断があったものの優勝した峯幸弘。一方、2位の橋本達宏は最後まで追いついてレースを面白くした

■フォーミュラEnjoy Class

辰巳秀一がホールショットを奪うと、3番グリッドスタートの永井秀和が2番手に浮上する。レースを盛り上げたのは14番グリッドと最後尾スタートだった山根一人だ。山根はレース序盤からぐんぐんと前を抜き去り、4番手につくと、前を走る永井をパス。3番手につくとトップの辰巳、2番手の大川文誠に迫り始める。大川と山根、さらに永井も加わり2位争いが三つ巴になる。辰巳は後続同士のバトルもあり、独走でトップチェッカー。終盤で大川がスピンで順位を下げたこともあり、2位は永井、3位は山根となった。



優勝した#6辰巳秀一。終わってみればまったく危なげのない走りで見事なポールtoウィンとなった



笑顔でシャンパンファイトに興じる上位3人のドライバー。山根一人は最後尾から表彰台を獲得してみせた

■FFチャレンジClass

ポールポジションは松下裕一、2番グリッドに鶴口裕太、毛利有佑、大橋孝之らが上位グリッドを形成してレースはスタート。松下が順当にホールショットを奪うと毛利が2番手に浮上し、これを鶴口が追う展開になる。大橋は鶴口をパスして3番手へ。すると大橋に対して、坂和晃がテールtoノーズで迫る。レース終盤。トップの松下と2番手の毛利は1秒近い差が開き始め、坂、大橋、林陽介、尾高伊織の上位陣の争いがレースを盛り上げる。レースはそのまま松下がポールtoウィン。毛利はファイナルラップで追い上げる意地は見せたが2位でフィニッシュした。



#31の松下裕一がポールtoウィン。一度もトップの座を譲ることなく、幸先よく開幕戦のウィナーとなった



優勝した松下裕一、毛利有佑、坂和晃の3人がトロフィーを受賞。互いに拍手を送りあい健闘を称えた

■スーパーFJ Class

ポールポジションスタートの岡本大地が好スタートで発進。2番手に元嶋成弥が5番グリッドからジャンプアップ、3番手争いは上野大哲を先頭に4台のバトルに膨れ上がる。3周目で元嶋が岡本をパスしてトップに出るが、その後、反則スタートのドライビングスルーペナルティが元嶋に課されてしまう。その後、上野が接触でマシンを止めると、2番手に中村賢明、下野璃央らが続き上位陣を形成する。トップの岡本は独走状態となり、中村と下野の2番手争いがデッドヒート。岡本がトップで逃げ切ると、2位は中村を抑えた下野となった。



#6の岡本大地がポールtoウィン。2番グリッドの上野大哲らが遅れるなか、スタートダッシュの成功が大きかった



表彰セレモニーでのシャンパンファイト。2位となった女性ドライバーの下野璃央も大健闘のレースだった

■FIT 1.5 Challenge Cup Class

ポールポジションは寺西玲央、続いて松尾充晃、西尾和早、西田拓矢、村田竜介が上位グリッドに並んだ。レースは寺西がホールショットを奪うと、蜂須賀清明が4番手にまで浮上する。トップ争いの4台が数珠つなぎの状態で行き続け、寺西を追うのは松尾、西尾、蜂須賀だ。中盤にかけて上位陣は膠着状態が続き、レースはいよいよ終盤へ。2位争いが激しくなったこともありトップの寺西はそのまま逃げ切り。ファイナルラップのシケインで仕掛けた西尾が松尾をパスして2位を獲得してみせた。



#72の寺西玲央がポールtoウィン。我慢のレースが続いたが、終始自分のペースを守り続けた



優勝した寺西玲央、2位の西尾和早、3位の松尾充晃。特に西尾のファイナルラップの逆転劇はお見事

Voice of Pick up Driver

この日、キラリと光った
ドライバーに一问一答

この日、キラリと光ったドライバー&チームに一问一答
「Voice of Pick up Driver&Team」。

スーパーFJ Class第1戦でポールtoウィン！

岡本 大地 選手 (FTK・レヴレーシング)



Q: 開幕戦でポールtoウィン。決勝を振り返っていただけますか。

「スタート直後に他のドライバーの方のミスもあり、上手くトップをキープできました。序盤から冷静に走れたと思います」

Q: 中盤から終盤にかけても独走状態で走る展開が多かったように思います。

「気持ちを切り替えファステストラップをマークしようと、自分の走りをする事を心掛けて集中を切らさないようにしていました」

Q: 最後に次戦以降への意気込みをお願いします。

「今シーズンはフル参戦予定です。次回以降も、残りの全レースで勝つこと。これだけを目標にして戦っていきます」